

大山の崩るる如く、鬨の声を挙げ坂を追い下しければ、高瓦の人数皆敗北す。善五郎は我一人の恥なりと踏み留まって、権左右衛門と火花を散らして切り結ぶが、権左右衛門痛手を負うて地に倒れれば、善五郎大音声を挙げて大将を討取りたるぞ返せと呼びけれども引立つたる勢の癖なれば返す者は一人もなく善五郎遂に討死にす。権左右衛門も四日目に死しける、大泰寺に葬る。人之を佐部之陣という。(鬼と苗字するは勇猛者にして人恐るる故なり。善五郎此の時名剣を佩ぶ、相野村禰宜田中山城が家に有りしが、新宮城主右近太夫に進上しけると也)

又「紀伊続風土記」に記する所は左の如し

古城跡 上田原佐部二村の村界登り二町余に在り平地五間に二十一間許り石垣堀形の跡残り、土人伝えいう当城は田村半之丞という人の築きし城にて天正年中三前郷の小山、高瓦両家当城を攻めし時永田椎橋(新宮の人)等是を助けて勝利を得たりという。

尚寛永十九年書上の「新宮領分道筋」には左の如く記載せり。

在所より丑寅に当り古城の跡有り、山の根廻り十丁三十間、高さ道通り二町二十間、二の丸東西へ六間半、北南へ二十一間、四方に高さ八尺の石垣あり。但し辰巳向西の方は岩ぜき、北の方は山の尾根続き、堀切巾三間深さ一間半の堀なり。東は谷川、此の方は水を城へ取申候由、此所へ城より五十間あり。前は小川ふけ田有り。此城は先年田村半之丞と申者拵候由。天正十年、古座の小山殿、高川原殿此の城へ取掛り候処を、上田原村塩崎新助、佐部村田村半之丞右二人の者大将仕り隣郷を催し合戦仕り追払申候、其時敵味方過分に討死仕候由に御座候、新助子喜三郎、半之丞子角左エ衛門只今在所に御座候。

第十三章 各種団体

一、赤十字社

明治二十年我が日本赤十字社の創立せらるるや当村に於ては入

社員甚だ僅少なりしが、其の後日清戦争の起るに当り漸く社員を増加し、三十七八年の戦役に際しては俄然其の数を倍加するに至り。本村に於ける赤十字社員数は大正七年七月の調査に於て終身社員三十五人、義務社員四十三人、計七十八人にして、其の筋に於て計画せる人口二十五人に対して社員一人の割当数八十四名に對し尚六人の不足を告ぐるものとす。

二、愛国婦人会

愛国婦人会は遅々として甚だ振わず、三十七八年戦役に際し大に入会を勧誘する所ありしも、未だ成績の見るべきものなかりしが、最近に至り漸く其の数を増加するに至り。現在会員は大正七年七月調に於けるものによれば終身会員九人に對し一人の割当数四十五人に比するときは尚二十八人の不足を告ぐるものとす。

三、在郷軍人会分会

在郷軍人会分会は明治四十三年十一月頃より各町村に分会を設置するに至り、本村分会も此の當時に設立せられ現在会員百二十六名(大正六年調)を有せり。而して大正五年一月本郡分会聯合会を組織し、各分会を統一するに及び本村分会も亦之に隷属せり。

四、同窓会

田原小学校同窓会は明治三十四年六月の創立にして年々大会を開き会報を發刊し逐次盛大に赴きけるが、明治四十二年十月解散して田原青年会に併合せり。

五、玉成会

田原小学校同窓会は解散したるにより学生の一人は相謀りて明治四十三年一月二日本会を設け、同校出身者にして中等程度以上の学校に修学せる男女を以て正会員とし同卒業生を以て賛助会員とし、年二回大会を開きて学生会相互の親睦を図り又時々講演会を開きて學術の研究、知徳の修養を図り。

六、青年会

各地の青年会の前身は所謂若衆組にして村内祭典の余興、消防、夜警等に從事するに過ぎざりしが、教育の普及と共に其の内容も漸次改良の域に向ひて補習、知徳の修養等に力を用いるに至り其の名も何々青年会と稱し各大字に設置したりしが、大正三年十一月内務文部両省の訓令の発布となり茲に青年会の組織に一大変事を見るに至れり。又本郡に於ては前記訓令の趣旨に則り郡青年会の統一を企劃し本郡青年団を組織し、大正四年二月第一回大会を開きたり。此の前後よりして郡内各町村青年会は漸次改造せらるに至れり。

本村は明治四十二年十月田原村青年会を設け、下田原、佐部、上田原に各支部を設け以て之を統一したるが、之より先下田原青年会にては青年俱樂部建設の儀起り、明治四十年二月竣工し同年十一月三日盛大なる落成式を挙げたり。上田原青年会支部に於ても大正五年俱樂部を建設せり。又佐部青年会支部も俱樂部を建築せり。

斯の如く青年会俱樂部の建設に次ぎ郡内に率先して村内青年会を統一し其の施設經營其の宜しきを得たるを以て明治四十四年三月左の如く表彰せられたり。

東牟婁郡田原村青年会

施設經營其ノ宜シキヲ得、成績頗ル優良ナリト認ム
依テ金十五円ヲ賞與ス
明治四十四年三月三十一日

和歌山県

注、本村青年会は統一せられたるも未だ内務文部両省の訓令に準拠して之を改造するに至らざるものなり。

この冊子は昭和十年九月田原尋常高等小学校に於いて謄写印刷されたものを書写したものです。一部漢字仮名遣いに原本と違いますがあることをお含みおき下さい。

書写人 田原在住 宮本學(九十歳)

平成二十七年八月

